



近世後期江戸語終助詞の意味と体系

| | |
|--------|---|
| 著者 | 黄 孝善 |
| 学位授与機関 | Tohoku University |
| 学位授与番号 | 文博第532号 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00122587 |

近世後期江戸語終助詞の意味と体系

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

黄 孝善

本論は、従来十分な意味記述の行われてこなかった近世後期江戸語の終助詞の意味を精緻に記述し、それをふまえ、江戸語終助詞の体系を明らかにしたものである。

終助詞は話し手の心的態度を示すものである。その意味を知るためには、当該の終助詞が用いられている文がどのような場面・状況で用いられているかを把握する必要がある。そこで、本論では終助詞が用いられた文を場面・状況に即して分類を行い、その共通の意味を検討した。それが終助詞の基本的な意味と考えられるためである。対象とした江戸語資料は、「辰巳之園」「遊子方言」「浮世風呂」「浮世床」「春色梅児譽美」「春色辰巳園」の6作品である。

1. 終助詞の意味

以下は本論で対象とした終助詞とその意味である。

- 1) 終助詞「ハ」は「話し手の側に「ずれ」が生じていることを示す」ものである。
「ずれ」とは、おかれている状況が話し手が想定しているものと合わないことをいう。
- 2) 終助詞「ゾ」は「自分が新しく感じた認識を情報として相手に伝え、それを新たに認識させようとしている」ものである。
- 3) 終助詞「ゼ」は「話し手がおかれた状況に対して、そこでの事実を指摘しながら、その状況に対して非難をしたり、マイナスの評価を与えていることを示す」ものである。
- 4) 終助詞「ナ」は「話し手が得られた情報を取り込む際に自分の経験を参照すると、その情報が自分にとって不安定なものなので、それを安定させようとしている過程を示す」ものである。
- 5) 終助詞「ネ」は「話し手が相手に自分の求めている情報があると見込んで、その情報を共有しようとする」というものである。
- 6) 終助詞「サ」は「相手がその話題について知らないので、話し手がそれを相手に分かるように示し、相手より自分が知っていることを示す」ものである。
- 7) 終助詞「ヨ」は「話し手が自分の話を押し付けて相手の認識を高めようとする」ものである。

- 8) 終助詞「エ」は「話し手がおかれている状況と想定していることが合わず、生じた認識の「ずれ」を解消しようとしている過程を示す」ものである。
- 9) 終助詞「カ」は「話し手は、自分がおかれている状況、あるいは、入っている情報について自分側に納得できないという不確かさが生じ、それを相手に示す」ものである。
- 10) 終助詞「ヤ」は「話し手は、自分の知識や認識を相手に伝えて、相手がそれに気付くようにしていることを示す」ものである。
- 11) 終助詞「イ」は「おかれている状況が自分にとって思ってもいなかったことが起きているという話し手の意外性を示している」ものである。
- 12) 終助詞「ノ」は「話し手が、おかれている状況について新たに認識を行っていることを示す」ものである。
- 13) 終助詞「ス」は、「自分が今述べていることが正しいものであると相手の認識を改めようとしている」ことを示すものである。

以上が江戸語終助詞の持つ基本的な意味と考えられる。

2. 江戸語終助詞の体系

江戸語の終助詞は、複合的に用いられる際には、決まった承接順があり、そこに階層がみられる。そこで、終助詞の承接順を明らかにし、それらが持つ階層性と個々の終助詞の意味の関係を明らかにした。その結果は、以下の表1のようになる。

表1. 江戸語終助詞の体系

| 分類 | 終助詞 |
|-----|------------------|
| A類 | カ ゾ ハ ゼ |
| B1類 | ヤ |
| B2類 | ヨ イ サ ス |
| C1類 | ナ |
| C2類 | ノ ネ エ |

〈対話調整の中の各々の終助詞の意味〉

話し手は、今起きている状況を情報として受容するが、それが自分として今までと異なるという新情報であると示すもので、それを対話参加者に伝えて、確認・同意などを求めようとする共同行為としての対話調整を行っているもの

話し手は、自分が受容している情報を伝えて、相手が受容できるように手伝おうとする共同行為としての対話調整を行っているもの

話し手は、自分が情報を未受容であることを示していて、それを受け入れるために助けてもらおうとする共同行為の対話調整を行っているもの

- 1) A 類は、他の終助詞の前に付くもので、これには「カ」「ゾ」「ハ」「ゼ」がある。共通点は「話し手はおかれている状況について新しく認識したものを示す」という点である。
- 2) B 類は、他の終助詞の前にも後ろにも付くもので、これには「ヤ」「ヨ」「イ」「サ」

「ス」がある。共通点は「伝えている情報が自分側にあるものとして示す」という点である。

- 3) C類は、他の終助詞の後ろだけ付くもので、これには「ナ」「ネ」「ノ」「エ」がある。共通点は「おかれている状況を自分のものとしてまだ受け入れていないことを示す」という点である。

そして、この3類は、現代語終助詞の研究で片桐恭弘が示す終助詞の対話調整機能と同様に対話調整を行っているものと考えられる。すなわち、A類の終助詞は「自分の受容した情報が今までと異なる新情報であることを示し、それを対話参加者に伝えることで、確認・同意などを求めようとする」対話調整を行っているものである。B類は、「自分が受容している情報を伝えて、相手が受容できるように手伝おうとする」共同行為としての対話調整を行っているものである。これに対して、C類は、「自分が情報を未受容であることを示して、それを受け入れるために助けてもらおうとする」共同行為の対話調整を行っているものと考えられる。

以上のように近世後期江戸語の終助詞の意味と体系について考察を行った。

論文審査結果の要旨および担当者

| | |
|---|--|
| 提 出 者 | 黄 孝善 |
| 論文審査担当者 | (主査) 教授 大木 一夫 教授 斎藤 倫明 教授 小林 隆 教授 後藤 斉 准教授 甲田 直美 |
| 論 文 名 | 近世後期江戸語終助詞の意味と体系 |
| <p>本論文は、近世後期の江戸語における終助詞について、その意味を記述し、また、それらの承接順序をもとにして、江戸語終助詞がどのような体系をなすかを明らかにしようとしたものである。本論は全7章で、それに序論としての序章、まとめとしての終章が付く。</p> <p>まず、序章において日本語における終助詞および終助詞研究のながれを概観し、本論における議論の方向付けをおこなう。その上で、これまでの江戸語終助詞研究の問題点を示しながら、本論の目的を述べる。</p> <p>続く本論の第1章から第5章までは、江戸語終助詞の意味の分析がおこなわれる。いずれの章も、江戸語テキストを丁寧に読みこんだ上で、各々の終助詞が用いられている状況を整理し、そこから、終助詞の意味を帰納している。第1章では終助詞「は」を分析対象とし、「は」は「話し手の側に「ずれ」が生じたことを表出する」ものであることを明らかにする。これは江戸語終助詞の精緻な意味分析といってよく、第2章以下もこれと同様のレベルの分析がおこなわれる。第2章は類義の終助詞「ぞ」と「ぜ」を対照しながら、その意味を考察しているが、ここでは両終助詞の待遇性・位相性も検討している。第3章では、終助詞「な」と「ね」を対照しながら、第4章では、終助詞「さ」と「よ」を対照しながら、そして、第5章においては終助詞「え」を分析している。いずれの分析も、これまでにおこなわれてきた江戸語終助詞の意味記述の記述精度を大きく超えるものである。本論の第6章は、続く第7章において江戸語終助詞の体系を明らかにするのに必要な範囲で、周辺のともいえる終助詞「か」「や」「い」「の」「す」の意味分析をおこなう。</p> <p>そして、以上の意味分析をふまえて、第7章において、これらの終助詞の承接順序を検討しながら、これらがどのような体系をなすかを考察する。その結果、これらの江戸語終助詞は、新情報受容を示すA類、情報受容済みを示すB類、情報未受容を示すC類の3類に分けられ、それらが3層の階層性をなすことを明らかにした。さらに、それを終助詞のもつ対話調整機能との関わりのなかで位置づけている。</p> <p>終章においては、以上の議論をまとめながら、本論文の意義と今後の展望を述べる。</p> <p>本論文は、江戸語資料をきわめて丁寧に読みこみ、それにもとづき江戸語終助詞の意味を精緻に明らかにするものであり、従来の江戸語終助詞の記述を刷新するものであるといえる。また、江戸語終助詞の体系の議論も、承接順序と終助詞の意味の関係を新たに明らかにするものである。この成果は、江戸語研究、さらには日本語文法史研究に大きく寄与するものといえる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p> | |